

全国でも珍しい「ブドウの有機栽培」の取組（赤須氏）

40年以上、化学合成農薬や化学肥料に頼らない果樹の有機栽培を実践しています。（現在：69歳）

◆ 栽培面積：約1.5ha（ブドウ、キウイフルーツ、水稻）

◆ 経緯等

- ・農家に生まれ、会社を中途退職して、就農（20歳代）
→父が、ブドウ栽培を開始。きっかけは、米の生産過剰が課題になってきた当時、土地改良事業による基盤整備後の水田を、転作奨励金（補助金）を活用して、ブドウ畑にした経緯有。キウイフルーツも同時期に取組開始。
（最初から、有機栽培ではなかった。父母二人での栽培であったが、母が体調を崩したこともあり、無農薬による栽培を検討。全国における取組例の情報収集や交流を始める中で、特に、山梨県の澤登氏との交流により、ブドウの有機栽培を本格化。しかし、山梨とは、自然環境も異なるので、土づくりも含め、この土地にあった栽培方法を、親子で試行錯誤を繰り返した）
- ・昭和52年に、雨除け施設を導入して、化学合成農薬を使わない栽培に取り組み、昭和59年には、化学肥料も使わない有機農業へと移行（品種は巨峰を中心に15品種）
→発送は、あえて色々な品種を組み合わせている。「受け取ったお客様が、比較をすることで、色々な発見や楽しみ（喜び）ができる。」
（有機JASに関する情報については知識を深めているが、顧客との信頼関係を主眼としているので、現在は有機JAS認証を取得することは考えていない）
- ・土づくりには、牛糞堆肥を使用し、状況等を観察しながらの対応
→鶏糞堆肥等、色々試したが、樹が暴れるなどの、失敗を経験した。近くの畜産農家の協力により、牛糞堆肥でうまくいくようになった。また、山の落ち葉を利用するなど、地域循環型農業の展開で、「樹の健康」を保っている。
（畑の健康、即ち微生物叢が豊かであることが基本で、健康な樹が、おいしい実をつける）
- ・キウイフルーツの栽培も、40年以上の歴史
→当時、キウイフルーツはニュージーランドからの輸入品しかなかったが、山梨の澤登氏をはじめ、全国の生産者仲間と（難色を示すニュージーランドとの交渉の結果、苗を初めて日本に輸入し）栽培を開始した。今は、知名度も高くなった果物だが、当時は、売るのが苦労した。現在、緑色の品種以外に、黄色と赤色の3品種を栽培・販売している。
（固定客が多く、約8割の方が、果樹園まで買いに来てくれる。以前に、東京でのPRに参加した時は、その効果で、多くの注文があったが、そのような客は去るのも早かった。今後も、これまでと同様の栽培規模で、園に来てくれるお客さんを大事にし、基本的に夫婦二人での有機栽培による取組（農業経営）を長続き出来るようにしていきたい）



□ 最近の展開等

- ～赤須氏からのコメント～
- ・畑でも、場所によって大きく異なるので、自分と同じ栽培方法で、他の人が同じように出来るとは限らないと思い、これまで、研修生の受け入れには消極的だった。
 - ・しかし、70歳も目前になり、自分で培ってきた技術伝承も大事だと考えるようになり、昨年、研修生を受け入れている。



「茨城県有機農業公開園場技術検討会」における講師

県北農林事務所で、ブドウ及びキウイフルーツの有機栽培に関する技術検討会を開催（平成24年度及び25年度：常陸太田市 天神林町）

◆ 講師：あすか農園代表 赤須氏（参加者：農業者、市町村、農協等）

～赤須氏からの説明(概要)～

- ・当地は、水田をブドウ園にしたところであり、ブドウ栽培にとっては適地とは言えないので、この土地に合った品種や栽培方法を検討し、取り入れている。
（この土地の気候風土に合った品種を育てる。定着する品種を探した）
- ・適地適産を心がけるとともに、黒とう病が発生しないように雨除けとし、灰色かび病が発生しないように風通しをよくするなどの工夫もしている。
- ・お客様に、「安全で、おいしいブドウ」を届けるのはもちろんのこと、畑の状況を理解する消費者を増やす取組をしていく。（農家と消費者との距離を近くしたい）
- ・有機農業に取り組む人が増えれば、一人では解決に何年もかかるような課題等も、短い期間で解決できるようになるかもしれない。

